

203年前の八郎神社

伊能忠敬測量団が記録

社前に至り鳥居、石段あり。祭礼料は二石。正二位八郎明神為朝公を祭

社す。本社^の御戸張は公儀より御奉納。御紋付紺地錦。ほかの御戸張は諸家方より奉納、紋紗唐草織散し。

神主菊池吉岐守、禰官^{ねき}七人、祭礼を夏冬両度行ふ。神体頼朝卿より金銅の神鏡、御彫形付奉納。慶長七千寅年、公儀、銅の神鏡、御影写し御奉納。当時三体安鎮す。(略) 御証文写。八丈島鎮守為朝大明神宮小島に有之。年に両度、本島の神主、卜部等の役者小島へ渡り、祭礼執行。年に米二石を下され置き候様願書差出候。(略) 宝永六年丑八月小勘左衛門印上野治助殿於小島為朝大明神別当虎之助八丈島役人。此外縁起等あり。

伊能忠敬測量団は1815年6月11日から3日間、小島を測量した。当時の小島の人口は男女493人(ほか流人6人)。地図上には「正一位八郎大明神」の文字と鳥居が、坪沢には為朝公御墓小社が見える。13日の測量日記には、打ち上げ測量となった八郎神社の姿が克明に記されている。一部要約すると次のような内容。

宝物は為朝公御弓一張、長さ八尺一寸五分(2尺4寸5分)。七人張十五束と云う。塗髹藤、握り下に銘あり。文曰、以古方陰陽弓形繕之、弓師・伯耆徳兵衛。御太刀一ツ、御長刀一ツ、御矢、歴股、尖矢、矢は朽損したり。黒塗の胴鏡^{たいわき}あり。御代官小林又右衛門奉納、宝永八辛卯三月吉日。以上。

明2)年に江川太郎左衛門の手代が巡見した時の『伊豆海島風土記』にも詳述されている。同書によると、家康の命で奉納された神影には甲冑も添えられた。以後、島を支配した代官はそれぞれ甲冑を奉納していた

鎮西八郎を名乗った平安時代末期の武将・源為朝は、1156(保元元年)の保元の乱で父為義と共に崇徳上皇方に参加するが敗れ、伊豆大島へ流される。が、それでも国司に従わず伊豆諸島を支配したので、追討を受け、自害した。

自害の地は、大島とも八丈小島ともいわれ、小島では八郎神社に、「正二位八郎大明神」が祀られた。高倉天皇から「八郎明神」の神号が下ったのは1173(承安3)年、と古書(『縁起叢書』等)にある。為朝が小島で自害したと伝えられる年だ。

体にして、高倉天皇(1161-1181年)の時に奉納された。公家、武家(源頼朝)の奉納者もあつた。1602(慶長7)年には徳川家康が八丈島代官・奥山縫殿助に命じ、金銅の神鏡に神影を写して再び作らせた(『八丈

711年)の津浪で供料地だった畑が失われ、祭礼途絶の危機に直面したこと。代官・小長谷勘左衛門は祭礼が絶えないよう米二石を神社へ毎年納める願いに応じ、以後、祭礼は年2回怠りなく続くことになった。

神像 たびたび開帳



小島・八郎神社(八丈支庁蔵)



小島・八郎神社の祭礼風景。1969年2月14日撮影(千葉県・高橋克男さん蔵)

江戸でも信仰 小島の為朝明神



八丈島歴史民俗資料館蔵の「銅板為朝神像(都指定文化財)。古書によれば、慶長7年に家康が奉納した神影には「正一位八郎為朝明神」とあつたというが、現存する神像には慶長7年作とあるものの、文字は現代風で、神号は彫り込まれていない。

711年)で、その後幕末までに湯島天神、西国回向院、深川永代寺でも公開された。為朝神像は、金銅の神鏡を神

島小島青ヶ島年代記」等)。伊能忠敬測量団によると、家康が奉納した当時、八郎神社には神像が3体安鎮していたという。八郎神社の祭礼の記録も数多く残る。御船預かり・服部義高の著書『八丈裁衣織』(1811年刊)によると、祭礼時は元地(八丈島)から下部も渡り、公儀から祭礼米が納められた。この歴史的な背景は、1782(天

が、この慣習は宝暦(1751-1764年)の頃に止む。また、神社の戸張は、江戸城で開帳した神像が返された時、寺社奉行所から寄進された。

『伊豆海島風土記』には、代官が祭礼米を納めるようになったいきさつも記されている。きっかけは、宝永年中(1704-1

小島集団離島50周年を前に